
第33回小出記念日本語教育学会年次大会より

第33回 プログラム

講 演 報 告

研究発表要旨

* 第33回小出記念日本語教育学会年次大会 *

日時：2024年6月29日（土） 9時45分～17時10分

開催方法：オンライン（Zoom）

申込締切：6月17日（月） 定員：400名 参加費：会員 無料 非会員 2,000円

事前申込登録：会員の方はMLをご参照ください。 非会員の方は以下よりお申込みください。

koide33th240629.peatix.com

* プログラム *

2024年6月29日（土）

09:45～10:15 会員総会

10:20～10:30 開会・プログラム説明

挨拶 玉岡賀津雄（小出記念日本語教育学会 学会長）

10:30～12:20 第一部 講演

「生成AIと言語教育は共存できるか」

講師：高橋薫氏

創価大学 学士課程教育機構准教授 総合学習支援センター副センター長

コメンテーター：保坂敏子氏

小出記念日本語教育学会 理事 日本大学大学院 総合社会情報研究科教授

12:20～13:20 お昼休憩

13:20～16:50 第二部 口頭発表

16:55～17:10 閉会・事務連絡

挨拶 丸山千歌（小出記念日本語教育学会 理事）

【口頭発表 第1会場】

●司会 西島絵里子（小出記念日本語教育学会 編集委員）

13：20～13：50 日本語言語学クラスにおける ChatGPT の活用

— AI 技術の有効性と課題 —

吉村由紀（マサチューセッツ大学アマースト校） 1-(1)

13：55～14：25 学習者は AI Chatbot サービスを活用した授業実践をどう受け止めたのか

— 台湾の大学における初級日本語会話授業から —

潘寧（台湾大同大学）菅田陽平（北京第二外国語大学） 1-(2)

14：30～15：00 非漢字圏日本語学習者の漢字語彙習得におけるタイピング練習の効果の検証

— 漢字語彙学習アプリ「Matcha」の開発 —

和田千明（国際基督教大学大学院生） 1-(3)

15：00～15：10 休憩

●司会 宮本真有（小出記念日本語教育学会 編集委員）

15：10～15：40 深い理解と協働を目指して

— 上級クラスでの音読劇実践と日本語教育への新たな展望 —

山本裕子（愛知淑徳大学）浅野享三（元南山大学） 1-(4)

15：45～16：15 多言語環境で育った継承日本語と第二言語の狭間にいる大学生の読解プロセスの観察

— 「発話思考法」を通して見える読解ストラテジーの特徴 —

藤本恭子（国際基督教大学）金山泰子（同） 1-(5)

16：20～16：50 泰日工業大学におけるタイ人日本語学習者の発話に関する問題点の研究

— 発話時の不安要素の観点から —

島田良幸（大阪観光大学別科）井上雅司（泰日工業大学） 1-(6)

【口頭発表 第2会場】

●司会 小西円（小出記念日本語教育学会 編集委員）

13：20～13：50 日本語学習者による [Adj+の+N] に対する認知言語学的アプローチ

角出凱紀（京都大学大学院生） 2-(1)

13：55～14：25 日本語インタビューテストにみられるメタ言語表現

— 韓国語母語話者のレベル別特徴に着目して —

西部由佳（早稲田大学）岩佐詩子（桜美林大学）奥村圭子（山梨大学）

金庭久美子（目白大学）坂井菜緒（武蔵大学）萩原孝恵（山梨県立大学） 2-(2)

14：30～15：00 介助のやり取りにおけるオノマトペの使用傾向の分析

— 介護職員に対する談話完成法から —

大場美和子（昭和女子大学）吉田輝美（名古屋市立大学） 2-(3)

15：00～15：10 休憩

●司会 根本愛子（小出記念日本語教育学会 編集委員）

15：10～15：40 ほめに対する応答に用いられる「いや」に関する一考察

— 日本語母語話者と日本語学習者の相違に着目して —

彭津（東京外国語大学大学院生） 2-(4)

15：45～16：15 複数言語話者による発話の仲介はどのように行われるか

— 多人数会話の観察をもとに —

千石昂（早稲田大学大学院生） 2-(5)

16：20～16：50 留学生における日本人との友人形成に至る過程

— 複線径路・等至性モデリング（TEM）による考察 —

加藤万豊（元日本大学大学院生） 2-(6)

【口頭発表 第3会場】

●司会 浅津嘉之（小出記念日本語教育学会 編集委員）

13：20～13：50 インドネシアにおける21世紀型スキル育成を目指した日本語授業の実態

— 中部ジャワ・パリの高校の調査から —

古内綾子（明治大学） 3-(1)

13：55～14：25 教師間の協働活動は教師をいかに変容させるか

— 報告会の語りから「教育観」に着目して —

松尾恵理沙（東京国際大学）狩野裕子（同）在國寺翔平（同） 3-(2)

14：30～15：00 「振り返り」を振り返る

— 日本語教育言説をめぐる探究的考察 —

高橋七緒（アーヘン工科大学）嶋津百代（関西大学） 3-(3)

15：00～15：10 休憩

●司会 鄭在喜（小出記念日本語教育学会 編集委員）

15：10～15：40 日本語教育を専攻する学生は「市民性×日本語教育」をいかに捉えたか

— 東日本大震災の被災地でのワークショップ参加者へのインタビューから —

澤邊裕子（東北大学）早矢仕智子（宮城学院女子大学） 3-(4)

15：45～16：15 避難民を対象に日本語学習支援を行う実践者にとっての困難点と意識の変容

島田めぐみ（日本大学）上林彰仁（ザグレブ大学）江崎由利子（元日本大学大学院生）

遠藤さくら（元日本大学大学院生）真保知子（同）羽野美佳（同）

牧久美子（名古屋大学日本法教育研究センター）松尾恵理沙（東京国際大学）

山下志織（元日本大学大学院生）保坂敏子（日本大学） 3-(5)

◆第33回年次大会アンケートにご協力お願いいたします◆

<https://forms.gle/WTy3iSHoNjCYuJpa7>

※学会開始後にアクセスできます。



問い合わせ・連絡先：小出記念日本語教育学会

〒181-8585 東京都三鷹市大沢 3-10-2 国際基督教大学日本語教育プログラム 小澤研究室気付

FAX：0422-33-3773

電子メール：office.koide.kinen@gmail.com

<https://koidekinen.org/>

主催：小出記念日本語教育学会

講演

生成AIと言語教育は共存できるか

講師：高橋 薫

(創価大学 学士課程教育機構准教授
総合学習支援センター副センター長)

生成 AI と言語教育は共存できるか

高橋薫（創価大学）

生成AIの登場により教育現場は大きく揺さぶられている。生成AIの活用により、教員の業務軽減や学習者の学びを支援することが期待される一方、使い方を誤れば知の空洞化を招いてしまう危険性も孕んでいる。では、言語教育の現場で生成AIと共存することは可能なのだろうか。共存が可能であるとするならば、どのような活用方法があり、何に配慮する必要があるのだろうか。また、教師の役割はどのように変化するのだろうか。本稿では、実践者の視点から生成AIの教育利用について論じる。

【キーワード】 生成AI 教育利用 記号設置問題 エンゲージメント

1. はじめに

2022年11月にOpenAI社がChatGPTを公開し、公開1ヶ月でユーザーが1億人を超えるなど、生成AIは急速な広がりを見せている。生成AIとは、「インターネット上の膨大なデータを学習し、人の指示に従って新たな文章、音声、画像、プログラムなどを短時間で作成できるAIの一種」（日経HR編集部 2023）である。生成AIは様々な産業や職種に影響を与えると考えられている。Felten, Raj, and Seamans (2023)は、どの職業が最も生成AIの影響を受けるかを評価したところ、テレマーケターや英語（米国における国語）、外国語、歴史などの高等教育の教員であると報告している。では、生成AIが普及すると言語教育はどうなるのか、生成AIと言語教育は共存できるのだろうか。本稿では、まず、生成AIで何ができるのか、また、文部科学省の生成AIの教育利用への対応を概観する。次に、大学生の生成AI利用状況と英語教育での活用事例を取り上げ、人間と生成AIの言語学習の違いを探ることで、生成AIと言語教育がどのように共存できるかを検討する。

2. 生成AIで何ができるのか

MITメディアラボ所長であった伊藤穰一は、自身の著書の中で生成AIができることとして、以下の8つの項目を挙げている（伊藤 2003）。これらを日本語教育や自分自身が業務で使用する文脈に置き換えながら、以下に具体例を提示する。

① 資料作成

生成AIは「着想のとっかかりづくり」「たたき台づくり」で役立つ（伊藤 2023）。ゼロから文章を作る、あるいはプレゼンテーションの構想を考えるのは非常に負荷の高い作業である。しかし、「『生成AIと言語教育は共存できるか』というテーマで90

分の講演を行います。アウトラインを考えて。」と投げかけてみると、瞬時に講演のアウトラインを時間配分とともに提案してくれる。そのまま採用できるレベルではないにしても、壁打ちのように質問を繰り返してブレインストーミングを行ったり、自分で加筆修正を加えたりすることで原案を精緻化することができる。最終的な文章の創作は書き手自身が責任を持つ必要があるが、ライティングのプロセスにおいて生成AIはチューターのような役割を果たすことができる。その一方で、学習者が安易にレポート作成を生成AIに代筆させてしまう可能性も否定できず、知の空洞化を招く危険性も考えられる。

② 画像・イラスト作成

生成AIはイメージを伝えることで、それに合わせて画像を出力することができる(伊藤 2023)。たとえば「『生成AIと言語教育は共存できるか』というテーマで講演を行います。ポスターを作って。」と投げかけると、生成AIが即座にポスターを作成してくれる。日本語教育では語彙や文型の導入などに絵教材を用いることが多いが、生成AIを利用することでオリジナルの絵教材を作ることができる。但し、生成した画像を利用する前に、Google レンズ (Google が提供する画像認識技術を利用したアプリケーション) で画像を検索し、酷似する画像がないか (著作権上問題がないか) チェックしておいた方が良いでしょう。

③ プログラミング

生成AIはプログラムの「下書き」を書いてくれる(伊藤 2023)。たとえば「Rで対応のあるt検定を行います。プログラムを書いて。」と投げかけると、検定を行うためのプログラムを出力してくれる。Rとはオープンソースのプログラミング言語で、データの分析や統計処理を行うことができる。Rで統計分析を行っていてエラーメッセージが出たり、躓いたりした時も、生成AIに尋ねることで解決方法を提示してくれる。但し、生成AIは誤ったコードを書くこともある。「誤りを見つけて正しく機能するように仕上げるのは人間の役割」であり、ある程度プログラミングの素養が求められる(伊藤 2023)。

④ 翻訳

テキストベースでは、その言語の読み書きができなくてもコミュニケーションできるようになり、「言語の壁」が取り払われる(伊藤 2023)。たとえば、日本語で作成した講義シラバスを英語に翻訳するなど、自分がゼロから翻訳するよりも精度の高い英語を生成することができる。また、生成された英文に納得がいけない場合、「AとBの違いは何?」と尋ねると、瞬時に回答してくれる。このように自身の業務の軽減には役立つものの、第二言語作文で学習者が本機能を利用する可能性が高いことから、言語学習という観点からは悩ましい問題でもある。「生成AIや翻訳ソフトを用いてはいけない」と禁止したところで、学習者は利用すると予想される。したがって、作文

を書いて終わりにするのではなく、書いた内容を元に発表させるなど、学習者のエンゲージメントを高めるための何らかの教授方略が必要になるだろう。

⑤ 検索

これまでの検索エンジンは「キーワードに対応するウェブページの一覧表」であったのに対し、生成AIは膨大なデータ分析に基づいた「要約」が提示される（伊藤 2023）。そのため、連続性をもった検索や「文脈」を踏まえた解説が可能になり、見つかったサイトの解説が難解な場合には「専門用語を使わずに」と指示することで「解説の難易度」を調整することもできる（伊藤 2023）。但し、生成AIは誤った情報（ハルシネーション）を提供することもあるので、ファクトチェックが必要である。

⑥ 整文

オリジナルの文章を「論文調」に変換したり、小さな子どもでもわかる表現に書き換えたりと、その場面に応じた文体に書き換えることが得意である（伊藤 2023）。日本語教育では学習者の言語レベルに応じて、読み物をリライトすることがあるが、そのような場合に便利な機能である。但し、著作物のリライトには権利者の許諾が必要な場合もあるので、事前に権利者に確認するか、パブリックドメインの作品を使用するなどの配慮が必要だろう。

⑦ サマリー

生成AIは長大なテキストのサマリーを瞬時に作ることができる（伊藤 2023）。ChatGPT-4では25,000字までのサマリーが可能であり、これは200ページ程度の書籍の約半分程度に当たる（伊藤 2023）。たとえば、文献レビューのために膨大な文献を読む際に、覚書としてサマリーを作成しておく、データ管理がしやすい上に、業務の軽減になるだろう。

⑧ 調べもの

生成AIは「人間のオーダーに従って、過去に書かれた研究論文やレポートを世界中から探してくる」ことができる。そのため、ハルシネーションの問題があったり、ファクトチェックが必要であったりするものの、従来の検索より効果的に調査できるようになった（伊藤 2023）。しかし、ChatGPT-3.5¹⁾では、2021年9月までのデータしか学習していないことから、利用には注意が必要である（伊藤 2023）。たとえば、ChatGPT-4やChatGPT-4oに「日本の総理大臣は誰」と尋ねると、2024年時点での正しい答えが返ってくるものの、ChatGPT-3.5では「2024年5月現在、私の情報は更新されていないので、正確な情報を提供できません。最新の情報を確認するか、インターネットで検索してください。」と表示される。

以上のように、自分自身の業務においては、生成AIを活用することで業務の軽減や効率化につながると考えられる。しかし、生成AIの回答は必ずしも正しいとは限らないということを踏まえて利用することが求められる。言語学習の観点からは、生

成AIを自身のチューターのように活用できれば、自分でできることが拡張されて自立的な学習の支援になる可能性がある一方、安易な使い方をすると、知の空洞化を招いてしまう危険性がある。高等教育で生成AIを活用する場合は知の空洞化を防ぐような学習環境デザインが求められる。

3. 文部科学省の生成AIの教育利用への対応

生成AIの急速な普及に伴い、文部科学省は2023年7月に「大学・高専における生成AIの教学面の取扱いについて」という通知を発表した。これによると、「各大学・高専において、具体的に行われている教育の実態等に応じて対応を検討することが重要であり、学生や教職員に向けて適切に指針等を示すなどの対応を行うことが望ましい」（文部科学省 2023）とされている。生成AIの利用を一律に制限するのではなく、教育の実態や目的に応じた対応が求められていることがわかる。また、「技術の進展や指針等の運用状況などに応じ、対応を適宜見直していくことが重要である」（文部科学省 2023）と述べられている。したがって、進展に合わせて対応を柔軟に検討することが求められると考えられる。

3.1 生成AIを利活用することが有効と想定される場面

生成AIを利活用することが有効と想定される場面として以下の3点が挙げられている。

① 学生による主体的な学びの補助・支援

具体的には「ブレインストーミング、論点の洗い出し、情報収集、文章校正、翻訳やプログラミングの補助等」（文部科学省 2023）などが挙げられている。これらの多くはライティングのプロセスに関わる項目であり、適切に使えば効果的にレポート作成を進めることができる。また、プログラミングの素養があれば、生成AIでプログラムの下書きを作成し、作業効率を上げることもできるだろう。

② 生成AIを使いこなすという観点を教育活動に取り入れる

具体的には「生成AIの原理への理解、生成AIへのプロンプト（質問・作業指示）に関する工夫やそれによる出力の検証、生成AIの技術的限界の体験」（文部科学省 2023）が挙げられている。これらは「生成AIは、今後さらに発展し社会で当たり前に使われるようになることが想定される」（文部科学省 2023）という視座からの提案になっている。

③ 教員による教材開発や、効果的・効率的な大学事務の運営等に利活用

生成AIの教育利用には、学生側の利用と教員側の利用が考えられる。学生に適切な利用を促すためには、生成AIは何ができて、どのような利点があり、どのような限界があるかを教員自身が知っておくことが求められる。そのためには、まず教員が

自分の業務で活用し、慣れておく必要があるだろう。

3.2 留意すべき観点

留意すべき観点としては、次の5つが挙げられている。

① 生成AIと学修活動との関係性、成績評価

「生成AIの出力をそのまま用いるなど学生自らの手によらずにレポート等の成果物を作成することは、学生自身の学びを深めることに繋がらないため、一般に不適切と考えられる」（文部科学省 2023）と明記されている。また、適切に評価するために口頭試験や小テストを組み合わせたたりすることも提案されている（文部科学省 2023）。前章でも述べたように、生成AIは「テキストベースでは、その言語の読み書きができなくてもコミュニケーションできる」（伊藤 2023）可能性があるため、生成された文章に書き手がきちんと関与しているかどうかを、異なる方法で確認する必要があるだろう。

② 生成AIの技術的限界

生成AIは、「ある語句の次に用いられる可能性が確率的に最も高い語句を出力することで、文章を作成していくものであり、AIにより生成された内容に虚偽が含まれている又はバイアスがかかっている可能性がある」（文部科学省 2023）。これらの問題を想定し、ファクトチェックを行って「出力された内容の確認・裏付けを行うことが必要」（文部科学省 2023）である。生成AIはヒトが行った質問に対する回答を提示するものの、それは問いを理解して正答を提示しているわけではないことを踏まえておく必要がある。

③ 機密情報や個人情報の流出・漏洩等の可能性

「生成AIへの入力を通じ、機密情報や個人情報が意図せず流出する可能性があるため、安易に入力することは避ける」（文部科学省 2023）。生成AIは大量のテキストや画像を取り込んで学習を行っているが、日本の著作権法では「AI 開発・学習段階」と「生成・利用段階」を分けて、著作権を取り扱っている。現時点では生成AIが学習するためにテキストや画像を取り込むことは著作権者の利益を害することにはあたらないとされている（文化庁著作権課 2023）。しかし、入力したテキストはAIの学習に使われてしまうので、個人情報の流出を懸念するのであれば、学習者が作成した作文を生成AIに読み込ませて評価・フィードバックを行うような場合には、学籍番号や氏名などの個人情報は外すなどの配慮が必要だろう。また、未発表の論文なども入力するとAIの学習に利用されてしまうので、「入力の内容を生成AIの学習に使用させない（オプトアウト）」（文部科学省 2023）設定をすることが提案されている。

④ 著作権に関する留意点

「AIを利用して生成した文章等の利用により、既存の著作物に係る権利を侵害する

ことのないように留意する必要がある」(文部科学省 2023)。たとえば、2章で、生成AIに講演のポスターを作成させる際にGoogleレンズを使って酷似する画像がないかチェックする例を示した。これはもし、同じデザインの画像が存在した場合、権利者に訴訟に持ち込まれる危険性があるからである。著作物の教育利用については著作権法第35条が定める1) 学校教育機関の、2) 教員や学習者が、3) 授業の過程において、4) 適切な範囲であれば、著作物を複製することが許容されている。また、1)～4)に加え、5) その学校が権利者団体であるSARTRASに公衆送信補償金を支払っていれば、権利者の許諾なしに教育機関のLMSなどに著作物をアップロード(サーバーへのアップロードは「公衆送信」とみなされる)することも認められている。しかし、授業外で教育機関のホームページにアップロードするような場合は、著作権法第35条の対象外となるので、著作物の権利者の許諾を得るなどの配慮が必要だろう。

⑤ AI等に関する基礎的な知識等の理解

「生成AIを含むAIの利活用に当たっては、大学・高専の学生等が、最新の動向、AIの普及による可能性とリスク、倫理面やデータリテラシー等を含むデジタル化社会に対応するための基礎的な知識・能力等について理解・習得することが重要である」(文部科学省 2023)。高等教育機関での学びにおいて最も懸念されるのは、学生自らの手によらずに、生成AIでレポート等の成果物を作成することであろう。これが常態化すれば、知の空洞化に繋がってしまい、大学での学びが根底から揺らいでしまう。これを防ぐためには大学で学ぶことの意義を問い直す必要があるだろう。大学に入るとということはアカデミアの入口に立つということである。大学でレポートを書くということは自ら問いを立て、その問いに対する自分なりの答えを先行研究(先人の知恵)を引用しつつ明らかにすることである。学生の全てが研究者になる訳ではないものの、初年次教育などでレポート作成を導入する際に、大学で学ぶ意義と研究公正(research integrity)とは何かを考えさせる必要があるだろう。

4. 大学生の生成AI利用状況

大学生の生成AIの利用はどの程度進んでいるのか。全国大学生生活協同組合連合(2024)は、2023年10月～11月に全国の国公立大学及び私立大学の学生($n=9,873$)に学生生活実態調査を実施した。同調査によると、生成AIの利用経験者は全体の46.7%、このうち継続的に利用しているのは約3割程度であったという。利用目的では「論文・レポート作成の参考」「翻訳外国語作文」「相談・雑談相手」が上位を占めていたと報告されている。このように、2023年の時点で既に学生の間で生成AIの利用が進んでおり、論文・レポート作成や外国語学習で利用されていることが明らかになった。また、乗添・ウン・池田(2023)は、九州大学の学生を対象に($n=584$)生成AI活用事例調査を実施した。その結果、「生成AIを日常的に利用している」「触っ

たことはある」「触ったことがない」が、それぞれ1/3ずつであった。また、生成AIへの抵抗感に関する質問では、「抵抗感はない」が37.3%、「あまりない」が35.8%と、半数以上が生成AIを肯定的に受け止めていることがわかった。また、生成AIの活用事例としては、「作業の効率化」（就活で企業の情報をChatGPTに読み込ませて自分が知りたい情報のみを抽出してもらう）や「スキル活用の補助」（プログラミングでエラーが発生し、自力解決できなかつたときにChatGPTに解決策を求める）に利用されていることが明らかになった。これらの結果について、同大学では多くの学部でプログラミングが必修になっており、活用のイメージがわきやすかつたのではないかと考察している。文部科学省（2023）では「生成AIを使いこなすという観点を教育活動に取り入れる」ことを推奨しているが、プログラミングの素養があり、自立的に学習する学生は、戦略的に生成AIを活用しているということであろう。

以上のように、2023年度の時点において、一部の学生の間では独自に生成AIの利活用を進めている様子が窺えた。教員が想定している以上に、学生に生成AIが浸透しており、利活用が進んでいる可能性がある。

5. 英語教育での活用事例

本章では英語の個別学習における活用事例と大学の英語教育での活用例を紹介し、生成AIによって教育がどのように変化するのかを提示する。

5.1 生成AIを活用した英語の個別学習

谷口（2023）は、英語の個別学習を英会話練習、リーディング、ライティング、リスニング、単語、試験対策、英文法の7つの項目に分けてChatGPTの活用方法をプロンプトとともに紹介している。たとえば、英会話練習では、プロンプトとしてあなた（AI）の名前、自分の名前、1回の会話のワード数、会話のトピックなどを入力する設定方法が示されており、指示通りに入力すればAIと対話できるようになっている。チャットに示された英文は読み上げ機能を使えば、あたかもAIと話しているような状態になり、没入感が生まれる。4技能の練習だけでなく、単語帳を作成したり、試験問題を作成したりできるため、教師自身が使いこなせるようになれば、そのまま授業の教材作成にも応用することができるだろう。谷口は、生成AIの活用は英語学習の個別最適化と高速化を促すと述べている。

5.2 大学の英語教育における活用事例

柳瀬（2023）は、大学の英語教育におけるライティングの実践例を紹介している。授業では、まず、学習者自身の力で英作文を行い、それを教員のChatGPT4に読み込んで文法や文体のフィードバックを行った。学習者はそのフィードバックをもとに英

作文を修正するが、最終稿では修正した英作文の他に、その最終稿に至った理由、語彙面、語法面、文体面の学び、全体的コメントを記述させている。修正して終わりではなく、なぜその最終稿に至ったのかというライティングプロセスの振り返りや、語彙、語法、文体に分けて学びを振り返り、意識化させている点が興味深い。また、柳瀬は「生成AI時代の英語力」は、「生身の英語力」+「サイborg的英語力」になることから、授業ではこの二つの往還を促進させることが求められると述べている。Mercer & Dörnyei (2020) は、言語学習において学習者が自発的、積極的に学習に関与する状態をエンゲージメント (engagement) と呼んでいる。知の空洞化を防ぐためには、柳瀬の実践のように学習者のエンゲージメントを高める学習環境デザインが求められるだろう。

6. ヒトと生成AIの言語学習の違い

最後に、ヒトと生成AIの言語学習の違いについて考える。なぜなら、そこには生成AI時代の言語教育のヒントがあると思われるからである。今井 (2023) は、日本人の子どもはオノマトペを言語習得の足場として日本語を習得するが、日本語学習者にはオノマトペは最も習得が難しい分野になるという。原因はオノマトペの習得は、「記号接地」の体験だからである。「記号接地とは元々人工知能の用語で、ことばと身体感覚や経験とをつなげること」(p85) を指す。ヒトは「みかん」と聞けば、色、形、触感、味など、様々な情報を思い出すことができる。これは「みかん」という記号と身体感覚が結びついているためである。一方、生成AIは、次に来ることばを予測するだけで、ことばと身体感覚や経験をつなげることができない。外国語学習が生成AIに依存することで記号接地を欠いてしまうと、生成AIの間違いに気づかず、間違いのループに陥ってしまうと警告している。したがって、身体性を伴う記号接地の機会を提供することが、生成AI時代の言語教育のカギとなる可能性がある。前章の柳瀬 (2023) の実践のように学習プロセスを振り返って意識化させるなど、何らかの方法で学習者のエンゲージメントを高める学習環境デザインが必要になると予想される。

注

- 1) OpenAI社は2024年7月18日にChatGPT-3.5を終了し、新モデルのGPT-4o miniに切り替えることを発表した。

参考文献

- 伊藤穰一 (2023) 『AI DRIVEN AIで進化する人類の働き方』SBクリエイティブ
今井むつみ (2023) 「言語習得に見る知性の本質 オノマトペ・記号接地・ChatGPT」『中央公論ダイジェスト AI時代のことば力』167、84-91

- 全国大学生生活協同組合連合（2024）全国大学生生活協同組合連合 第59回学生生活実態調査
概要報告 <https://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html>（2024年5月27日）
- 谷口恵子（2023）『AI 英語革命. ChatGPTで英語学習を10倍効率化』リチェンジ
- 日経HR編集部（2023）「生成AI・ChatGPT」の項『日経キーワード 2024-2025』日経HR
- 乗添凌太郎・ウクアンイー・池田悠登（2023）「大学生の生成系AI活用実態と今後の
展望」国立情報学研究所 第67回教育機関DXシンポジウム アーカイブズ
<https://edx.nii.ac.jp/lecture/20230707-06>（2024年5月27日）
- 文化庁著作権課（2023）「令和5年度 著作権セミナー AIと著作権」令和5年6月
https://www.bunka.go.jp/seisaku/chosakuken/pdf/93903601_01.pdf（2024年5月27日）
- 文部科学省（2023）「大学・高専における生成AIの教学面の取扱いについて（通知）」
<https://www.mext.go.jp/kaigisiryoy/content/000245316.pdf>（2024年5月27日）
- 柳瀬陽介（2023）「大学英語教育におけるChatGPT活用型授業実践：英語教師が認識する
生成系AI活用の可能性と限界」国立情報学研究所 ChatGPT-教育機関DXシンポジウム
<https://www.youtube.com/watch?v=WD4G17JfSrY>（2024年5月27日）
- Felten, E.W., Raj, M., & Seamans, R. (2023). How will Language Modelers like ChatGPT Affect
Occupations and Industries? Available at SSRN: <https://ssrn.com/abstract=4375268>
- Mercer, S., & Dörnyei, Z. (2020). *Engaging Language Learners in Contemporary Classrooms*. Cambridge
University Press.

講演 生成AIと言語教育は共存できるか

生成AIは急速な進化と広がりを見せ、様々な分野で活用されている。教育分野も大きな影響を受けると見られ、2023年7月には文部科学省より「大学・高専における生成AIの教学面の取扱いについて（周知）」が発表された。外国語教育では、翻訳やライティングの活動への影響が考えられるが、実践事例などの情報が現場の教師に十分に共有されているとは言えず、生成AIに関心はあるが授業での利用に踏み出せないという教師も少なくないと思われる。

小出記念日本語教育学会では、2024年2月に「生成AI時代の日本語教育と著作権を考える」をテーマとして2023年度第16回ワークショップを開催した。第33回年次大会では、第16回ワークショップで発題および司会をご担当いただき、日本語教育と教育工学を専門に長年ライティングの指導と研究をされてきた高橋薫氏に講演をお願いすることとした。講演では、高橋氏と共同研究を行う保坂敏子氏をコメントーターに迎え、実践者の視点から生成AIの教育利用を考えた。

講演の概要

- 講師：高橋薫氏
創価大学学士課程教育機構 准教授 総合学習支援センター副センター長
- 会場：オンライン会議システム（Zoom）
- 講演の流れ：
 - 10：30-10：33 登壇者の紹介
 - 10：33-12：00 講演

講演内容

講演ではまず、現在公開されている主な対話型生成AIの紹介があった。その中でChatGPTを取り上げた引用資料をもとに、大学生の利用率が教員の利用率を上回っている状況が示され、教育現場において生成AIとどのようにつきあうかが喫緊の課題であるとの問題提起がなされた。

続いて、生成AIでできることについて、元MITメディアラボ所長の伊藤穰一氏の著書にある8つの項目（資料作成、画像・イラスト作成、プログラミング、翻訳、検索、整文、サマリー、調べもの）を取り上げ、それぞれ高橋氏自身が作成した具体例を交えながら詳細にご説明いただいた。生成AIの安易な利用による知の空洞化の危険性や著作権上の問題、ファクトチェックの重要性等が指摘され、また、教員の業務

の軽減につながる利用についてもご説明いただいた。さらに、知の空洞化や学生が利用する際の教員側の留意点についてコメンテーターの保坂氏とのやりとりがあり、教員がガイダンス時に利用上の注意点を示すことでクラスのルールとなるとの説明があった。

文部科学省の生成AIの教育利用への対応については、2023年7月に発表された「大学・高専における生成AIの教学面の取扱いについて（周知）」の内容を解説していただき、教員にも学生にも情報活用能力と情報モラルの育成が求められること、学生に適切な生成AIの利用を促すのであれば、教員がある程度習熟しておく必要があること等の課題が示された。保坂氏とのやりとりでは、授業デザインの中に情報モラルが組み込まれる必要性が指摘された。

また、英語教育での活用事例の紹介もあり、生成AIが活用できれば学習の個別最適化や高速化が可能であること、学習者のエンゲージメントを高め、望ましい方向で生成AIを活用した自律学習へと導く学習環境デザインが必要であることが示された。

最後に、コメンテーターの保坂氏により、生成AI時代に求められる個人と言語教師の能力という視点から総括され、私たちの教育能力観や言語能力観を変える必要性について言及があった。

講演を振り返って

大会当日、本講演には約200名の参加が確認された。講演の進行上、質疑応答の時間は設けていなかったが、大会アンケートの結果からは本講演テーマに対する参加者の関心の高さが窺えた。

アンケートでは、「大変興味深く、どちらかという生成AIへの警戒心が強かった私も、上手く使って共存して行けそうな、前向きな気持ちになった」「生成AIを使ったことがない者にも、その利点と問題点、教育現場への応用などをご説明くださり、大変わかりやすかったです。保坂先生が要所、要所で質問して下さったことで、より講演の内容が深く理解できた」「言語教育に携わる教師は、生成AIと共存する上で、業務軽減になるメリットと、知の空洞化の危険性を意識しながら、学生が生成AIを活用することを前提として、教育を実施していく必要があることが分かった」などの感想が寄せられた。

参加者一人ひとりが自身の教育現場で生成AIとの共存を考える機会となり、大変有意義な講演会だったと言えよう。

最後に、ご講演を快くお引き受けくださった高橋薫氏とコメンテーターの保坂敏子氏、ご参加くださったすべての方々へ心より感謝いたします。

2025年3月 大会実行委員一同（文責 野原ゆかり）

研究発表要旨

日本語言語学クラスにおける ChatGPT の活用

— AI技術の有効性と課題—

吉村由紀 (マサチューセッツ大学アマースト校)

ChatGPTの活用や不正使用の可能性について、学習者が書いた文章とChatGPTが生成した文章の類似性やその精度についてなど様々な報告があるが(吉村 2023)、語学学習以外での生成AI使用に関する研究は少ない。本研究では、語学学習ではなく、日本語言語学の分野におけるChatGPTの有用性と学習者による主観評価を分析した。

米国州立大学における日本語言語学の授業において、学生にChatGPT(GPT-3.5モデル)を使用してもらい、チャット内容を分析した。教師が授業で講義した後、指定された内容について、学生がChatGPTにプロンプトとして質問を投げかけ回答を得る。対象とした内容は、1) 和製英語の例、2) 自動詞・他動詞の用法と例文、3) 形容詞につく接尾辞とその用法、4) 職業を表す接尾辞とその用法、5) 和語と英語の語彙の特徴、6) 重箱・湯桶読みの例、7) 助詞「は」と「が」の用法と例文、の7項目である。

有用な回答が得られた項目は、1)、2)の項目で、定義、例ともに適切な回答が得られた。2)の用法については、受動的な意味合いの強い自動詞で混乱が見受けられた。3)でも比較的有用な回答が得られたが、一部「活発み、興味深み」のような誤答もあった。4)と5)では、ウェブ検索結果以上の回答は得られなかったが、プロンプトの質が回答に起因している可能性がある。誤答が多かった項目としては、6)で9割以上が誤答となり、ユーザー側で正しい説明を与えた後でも、誤答が続いた。プロンプトに使用する言語によって回答の有用性が異なった項目は7)で、日本語に比べて英語のプロンプトのほうが、有用な回答例が見受けられた。学生の主観評価は、ChatGPTがもたらす肯定的な学習効果に大きな可能性を感じていることが明らかとなった。

現段階では、生成AIが出力する誤答を学習者が鵜呑みにしてしまう可能性を危惧すべき点もあるが、生成AIが日々飛躍的に向上している現実を考えると、日本語教育においても、学習ツールとしての効果的使用法を模索し続ける必要性が高いと言える。

参考文献

吉村由紀 (2023) 「ChatGPTの日本語教育における活用可能性と懸念—生成文章の類似点・相違点の分析より」 2023 Canadian Association for Japanese Language Education Annual Conference *Proceedings*. (pp.196-205). https://www.cajle.ca/wp-content/uploads/2023/11/24-CAJLE2023Proceedings_YoshimuraYuki.pdf (2024年5月7日)

学習者はAI Chatbotサービスを活用した 授業実践をどう受け止めたのか

—台湾の大学における初級日本語会話授業から—

潘寧（大同大学）・菅田陽平（東海大学）

本稿は、台湾の大学の初級日本語会話授業において、AI Chatbotサービス（以下、対話型AI）を活用し、学習者が得た気づきや学びに焦点を当てて論じたものである。

現時点のAIの日本語会話能力では、雑談内容に矛盾が生じる場合がある（頼2022）。それでも、AIを利用した外国語学習には複数の強みが存在しており、時間や場所に縛られず、いつでも練習ができる点、学習者の言語不安を軽減し（Hsu et al. 2021）、自己効力感を高め、目標言語の使用意欲を高める効果が期待される。また、Saraswati et al. (2023) は、対話型AI「Replika」を授業に取り入れた研究において、母語話者の代役としてAIを使う場合、教師による文脈的な指導が不可欠であると指摘している。

そこで、筆者は対話型AIを日本語の「練習相手」として位置づけ、その経験から得られた気づきや学びについて、グループで話し合ってもらい、授業時間中にクラス全体で共有する場を設けた。授業後の調査によると、目標言語を使う際の不安と緊張感を軽減できる利点のみならず、練習の過程自体が学習者自身の日本語使用を見直す契機となっていた。例えば、日本語の普通体に対する認識の「ずれ」やAIとの会話だからこそ、関係が損なわれかねない表現を試しに試してみた行動などについて、AIと人間とで異なるコミュニケーションについての振り返りがなされていた。

返答内容の難易度や談話のスタイルを調整することが難しい現状では、対話型AIとの会話練習を実際のコミュニケーションへと活かすためには、教師による適切な支援、協働的な学び、そして、創（想）造的な課題設定が不可欠である。今後も、対話型AIのような新たなテクノロジーとの共存を見据え、より効果的な学びのデザインを探求していきたい。

参考文献

頼錦雀（2022）「日本語教育から見たAIの言語能力」『台湾日本語文学報』51、103-128

Hsu, M. H., Chen, P. S., & Yu, C. S. (2021). Proposing a task-oriented chatbot system for EFL learners speaking practice. *Interactive Learning Environments*, 1-12.

Saraswati, G. P. D., Farida, A. N., & Yuliati. (2023). Implementing AI Replika in higher education speaking classes: Benefits and challenges. *Journal of English Language Teaching*, 6(1), 207-215.

非漢字圏日本語学習者の漢字語彙習得における タイピング練習の効果の検証

—漢字語彙学習アプリ「Matcha」の開発—

和田千明（国際基督教大学大学院生）

近年、デジタル機器の普及により手書きで漢字を書く機会が減少している。キーボードで漢字語彙を産出するためにはまずその読みを入力する必要があり、その後候補漢字の中から該当する漢字を再認し、選択する。漢字学習において「読み」の能力がこれまで以上に重要になっているのである。従来の手書きスキルに加え、タイピングスキルの習得が非漢字圏学習者にとって有益である可能性が高い。そこで本研究では筆者が開発したiOSアプリ「Matcha」を用いて、非漢字圏日本語学習者のタイピング演習が漢字語彙の学習に与える影響を検証した。20名の学習者を対象に、手書きで学習する「リスト条件」とタイピングで学習する「アプリ条件」のそれぞれにおいて漢字語彙を学習させ、即時テストと遅延テストで成果を測定した。

ウィルコクソンの符号順位検定による分析の結果、初級学習者では二条件間に有意差は見られなかった。一方、中級学習者では漢字語彙を産出する設問においてアプリ条件に優位性が見られた。ただし、遅延テストでは有意差は確認できなかった。この結果から、中級学習者におけるタイピング演習は短期的には効果があるが、長期的な記憶には持続しない可能性が示唆された。参加者の回答を語彙別に分析した結果、漢字語彙を読む設問では、リスト条件で学習した語彙について濁点や長短母音に関する誤りが多く見られた。一方、アプリ条件で学習した語彙では、長音や濁点の欠落など音韻認識に起因する誤答が少ないことが明らかとなった。また、漢字語彙を産出する設問に関しても、リスト条件では漢字語彙の変換ミスが目立ったが、アプリ条件では変換ミスに起因する間違いは見られなかった。この結果は、タイピング演習は日本語の正確な音韻の学習や同音異義語の学習に貢献する可能性を示している。

事後アンケートでは、アプリ学習を好む理由として「便利」「楽しい」「使いやすい」などが挙げられた。魅力的で利用しやすい学習ツールは、学習者の学習意欲を向上させ、言語学習をより楽しいものにすることができる。一方で手書きを好む理由には「実際に手で書いた方が覚えやすい」「手書きでの学習に慣れている」などがあった。改善要望としては「発音・例文の表示」「学習進捗の表示」などが挙げられた。

本研究は、日本語教育においてテクノロジーの重要性を示し、魅力的で効果的な学習環境を創出するための指針となる。本研究が今後、効果的な漢字指導の指標として日本語教育の授業に役立てられることを願う。

深い理解と協働を目指して

—上級クラスでの音読劇実践と日本語教育への新たな展望—

山本裕子（愛知淑徳大学）・浅野享三（元南山大学）

演劇的手法を外国語教育に取り入れる試みには多様なものがある。その一つである音読劇（Readers Theatre、以下RT）は、「複数の読み手が暗唱せずに脚本を手にして読む」活動で、表現活動が未経験な者にとっても心理的な障壁が上がらず、取り組みやすい活動であるとされている（浅野・草薙 2015）。英語教育においては初等・中等教育を中心に広く導入されており、読解力養成に留まらず協働学習としても効果があると報告されている（ムーディ他 2019）が、日本語教育では報告が限られている。本発表では2022年度より上級クラスで日本語母語話者も交えて協働で行ったRTについて概要を報告し、RTが日本語教育の新たな展望となるかどうか考えた。

本実践では日本語上級クラス（2022年度7名、出身は5カ国、2023年度5名、同3カ国）に日本語母語話者を加え、5、6人ずつ2グループで、90分2回の授業で浅野（2022）を参考にRTを実施した。題材には『シュモーハウス』（多読ライブラリ <https://tadoku.org/japanese/book/4644/>）という読み物を選択し、台本化したものを提示した。学習者の振り返りの記述から、学習者の得た学びを分析したところ、読解の深まりや音声表現への理解といった言語スキルに関する面だけでなく、RTを実践するには状況に適した非言語表現が必要であるという一致した認識がみられた。また、全員の振り返りのどの部分にも協働で作業したことへの言及があった。RTでは、作品を仕上げるために協力することが不可欠であるが、グループでの協働というRTの特性から多くの学びを得ていることが窺える。以上のように日本語教育においてもRTが言語学習、協働学習の2つの面を育成する学習活動となるという示唆が得られた。

参考文献

- 浅野享三（2022）「ようこそ、英語音読劇へ！ Welcome to Readers Theatre!」『AH-HA DUDEBOOK OF READERS THEATRE』（非売品）、6-24
- 浅野享三・草薙優加（2015）「英語音読劇の実践—群読とリーダーズ・シアターの交差的視点から—」『IAPL Journal』 Vol.2、20-36
- ムーディ美穂・浅野享三・野村和宏（2019）「表現力と聴衆の存在—コミュニケーション能「表現力と聴衆の存在—コミュニケーション能力を高める舞台発表の可能性—」『名古屋外国語大学論集』 5、247-281

多言語環境で育った継承日本語と第二言語の狭間にいる 大学生の読解プロセスの観察

— 「発話思考法」を通して見える読解ストラテジーの特徴—

藤本恭子（国際基督教大学）・金山泰子（同）

本調査は、多言語環境で育った継承日本語と第二言語の狭間にいる大学生3名の読解プロセスを観察し、読解ストラテジーと理解度について考察したものである。調査の方法は、テキストを音読しながら考えたことを話す発話思考法を用い、発話データをBlock（1986）の15項目のコーディングに基づいて分類した。テキストは2021年7月10日朝日新聞天声人語「アメリカザリガニの規制」である。フォローアップインタビューでは、テキストの要約をさせた上で、読みのストラテジー等について質問した。

対象者3名は多くの読めない漢字語彙やわからない語彙がありながらも、テキストの要約はほぼ的確にまとめられており、内容は理解できていたことがうかがえた。また、対象者らに共通して多く見られたストラテジーは、「理解度についてのコメント」「解釈・仮説・推論」「前文脈と関連付け」の3項目であった。彼らは多くの漢字語彙の読みで躓き一見テキストの理解が困難であるかと思われたが、上記のようなストラテジーを有効に活用してテキストの理解につなげていることが観察された。また、キーワードとなる言葉を3名とも読めて理解できていたことが、テキストの理解へとつながっていたのではないかと思われる。

筆者らが2019年に実施した、継承日本語話者を対象とした同主旨の調査結果（金山・藤本 2019）と比較すると、本調査の対象者である第二言語と継承語の狭間にいると考えられる学生は、自らの経験や知識を利用したり自らの意見を述べたりするよりむしろ、客観的にテキストの内容を理解しようと読み進めていたことがうかがえた。

今回の調査で観察されたようなストラテジーの意識的な使用や、今回の対象者らが使用していなかったストラテジーにも着目し、今後の継承日本語教育や狭間にいる学生の教育において、教材作成や学習指導などに活かしていきたい。

参考文献

- 金山泰子・藤本恭子（2019）「継承日本語話者である大学生の読解プロセスに関する調査—発話思考法を用いたパイロットスタディー—」『ICU日本語 教育研究』15、37-56
- Block, E. (1986) The Comprehension Strategies of Second Language Readers. *TESOL Quarterly*, 20, 463-494.

泰日工業大学におけるタイ人日本語学習者の発話に関する問題

—発話時の不安要素の観点から—

島田良幸（大阪観光大学別科）・井上雅司（泰日工業大学）

泰日工業大学の日本語科目の学習者数は1学年400～500名おり、1クラス30名ずつ以上で授業を実施している。1年生はタイ人教師が、2年生はタイ人教師と日本人教師のペアティーチングで授業を行い、オリジナル教材を使用している。

本研究は、泰日工業大学の日本語学習歴の浅い1年生と2年生のタイ人学生を対象に日本語の発話時の不安要素の観点から、小河原（2001）のアンケート質問項目を参考に質問項目と5段階の評価を設定し、タイ語のみでアンケート調査を行った。アンケート結果の信頼性係数は0.971であった。アンケート結果を分析する際に、統計ソフトであるJamoviを用いて分析した。

そして、1年生の不安因子の要素として高い値が出ている質問事項を並べていくと、第一因子に当たる質問事項が11個、第二因子が10個、第三因子が4個という結果になった。この結果から、一番目の因子は、「発音学習不足への不安」、二番目の因子は、話していて相手に「意味が通じるかの不安」、三番目は「発音の正しさに関する不安」ではないかと分析した。また、2年生の不安因子で高い値が出ている質問事項を並べていくと、第一因子に当たる質問事項が19個、第二因子が9個、第三因子が5個という結果になった。この結果から、一番目の因子は「他人からの発音評価への不安」、二番目の因子は「他者との発音比較」、三番目は「発音の正しさに関する不安」ではないかと分析した。さらに1年生の第一因子から第三因子を見たときに、特に自らの意識の中において発音に関する不安を感じる傾向があることがわかった。つぎに、2年生の第一因子から第三因子を見たときに、他者からの評価で不安を感じる要素で、次に自他の発音比較により不安を感じる傾向があることが明らかになった。

一方、1年生と2年生に共通する不安因子は自分の発音の正しさに関する不安であると考えられる。また、2年生からネイティブの教員からの評価で発音に関する不安が増す可能性があるが、ネイティブの教員を深く知ることと安心感を感じる可能性もあり、2年生と3年生以降の学生との不安因子の比較をするのも必要ではないかと考えられる。

参考文献

小河原義朗（2001）「外国人日本語学習者の日本語発音不安尺度作成の試み—タイ人大学生の場合—」『日本語教育論集 世界の日本語教育』11、39-53

日本語学習者による [Adj+の+N] に対する 認知言語学的アプローチ

角出凱紀（京都大学大学院生）

日本語学習者においてしばしば観察される誤用の一つとして、[Adj+の+N] の使用 (e.g. *小さいのアパート / *若いの頃 / *古いの映画) が挙げられる。本研究では、日本語学習者による「の」の過剰使用の実態をコーパス調査によって明らかにし、認知言語学の立場から分析を試みる。調査の結果、[Adj+の+N] に統計的に有意に生起する形容詞は「小さい」「古い」「近い」「寒い」のみであった。また、名詞に関しては、「時」「ほう」「映画」のみが [Adj+の+N] に統計的に有意に生起することが確認された。前者は一部の形容詞が [Adjの] (e.g. 小さいの / 古いの) として定着していることを示唆するものであり、いわゆる準体助詞仮説と良く整合する (cf. 正高 1997)。その一方で、後者は一部の名詞が [XのN] (e.g. Xの時 / Xのほう) として定着していることを示すものであり、格助詞仮説と良く整合する (奥野 2004)。このように一見相反する結果が得られたことを踏まえて、本研究ではこれまで一纏めにされてきた「の」の過剰使用に次の三つの下位分類を設けることを提案する。一つ目は、形容詞が誤って [Adjの] として定着していることが原因で起こるもの (e.g. [小さいの] + [N] > [*小さいのアパート]) である。二つ目は、例えば「子供の時」「学生の時」といった事例から抽出された構文スキーマである [Nの時] の拡張事例として生じる「*若いの時」のような誤りの類である。三つ目は、[古いの] + [Nの映画] > [*古いの映画] のように、上述の [Adjの] と [XのN] が融合 (山梨 2000, 2009) することで生じるものである。換言すれば、日本語学習者による過剰な「の」は格助詞であることも、準体助詞であることも、またはその両方であることもあると結論づける。これにより、先行研究で支持されてきた格助詞仮説を残しつつも、[Adj+の+N] に生起する形容詞に偏りが見られることも問題なく説明される。

参考文献

- 奥野由紀子 (2004) 「日本語学習者の『の』の過剰使用にみられる言語処理のストラテジー」『横浜国立大学留学生センター紀要』11、47-60
- 正高信男 (1997) 「文法の獲得〈2〉—助詞を中心に—」小林春美・佐々木正人 (編) 『子どもたちの言語獲得』大修館書店、131-151
- 山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』くろしお出版
- 山梨正明 (2009) 『認知構文論—文法のゲシュタルト性—』大修館書店

日本語インタビューテストにみられるメタ言語表現

—韓国語母語話者のレベル別特徴に着目して—

西部由佳（早稲田大学）・岩佐詩子（桜美林大学）・奥村圭子（山梨大学）
金庭久美子（目白大学）・坂井菜緒（武蔵大学）・萩原孝恵（山梨県立大学）

本研究では、日本語インタビューテストにみられるメタ言語表現のレベル別特徴を明らかにすることを目的とする。西部他（2023）が上級・超級の韓国語母語話者のインタビューデータを分析して示したメタ言語表現の6分類—（1）焦点化（2）論点化（3）行動表示（4）ことわり（5）言い淀み（6）緩和化—を基に検討した。

調査データは国立国語研究所『日本語学習者会話データベース』を用い、音声データのある韓国語母語話者、初級-上（5名）、中級-上（14名）、上級-上（7名）、超級（3名）の計29名のデータを対象にメタ言語表現の分析を行った。調査者6名がペアでメタ言語表現と思われる箇所を抽出し、西部他（2023）が示した上記（1）から（6）の分類を基に判定した。その結果、初級-上レベルではメタ言語表現と判定できる使用はみられなかった。また中級-上レベルでも、メタ言語表現の使用は限定的で、（3）行動表示（「正直に言うと」）、（4）ことわり（「説明できない」）、（5）言い淀み（「なんていいですか」）はみられたが、不完全な形（「なんといいか」等）での出現が多かった。しかし上級-上・超級レベルになると、中級-上でみられた（3）、（4）、（5）に加え、（1）焦点化（相手の発話を受けて「どういうことが大きいかという」と）、（2）論点化（「先ほどもおっしゃったように」）、（6）緩和化（話し終わりの断定的な言い方を避け「同じかなっていう」）の使用がみられ、特に（2）論点化、（5）言い淀みにおいて、相手を意識したやりとりがメタ言語表現の使用を通して確認された。

以上のことから、初級ではメタ言語表現はみられないが、中級になると会話の流れをとめずに不完全ながらもメタ言語表現を用いて会話を進めるようになり、上級・超級では相手の発話と関連付けたり、相手に配慮したりしながら、メタ言語表現を用いて結果的に共話的な談話を作り上げるという過程が明らかになった。

参考文献

西部由佳・岩佐詩子・奥村圭子・金庭久美子・坂井菜緒・萩原孝恵（2023）「日本語インタビューテストにみられるメタ言語表現の分類とその役割—上級・超級韓国語母語話者に着目して—」『2023年度日本語教育学会秋季大会予稿集』 231-235

国立国語研究所『日本語学習者会話データベース』 <https://mmsrv.ninjal.ac.jp/kaiwa/>
(2024年6月29日閲覧)

介助のやり取りにおけるオノマトペの使用傾向の分析

—介護職員に対する談話完成法から—

大場美和子（昭和女子大学）・吉田輝美（名古屋市立大学）

本研究の目的は、介助のやり取りにおけるオノマトペの使用傾向を、利用者の動作を促すことが困難な介助の場面に着目し、介護職員に対する談話完成法により収集した会話データから明らかにすることである。オノマトペは効果的に利用者の動作を促す効果もあるものの、外国人介護人材にはその理解や習得が困難であると指摘されている。そして、実際の就労場面の介助では、利用者が介護職員の介助に対して不満や拒否を表明したり、認知症の場合は介護職員の言うことが伝わらなかったりすることが多々ある（大場 2020、大場・吉田 2023）。そこで、調査では、介助が困難な状況の7場面（入浴介助、着替えの介助、排泄介助（トイレ誘導、オムツ交換）、口腔ケアの介助、認知症の介助（帰宅願望2種））を設定した。そして、介護職員40名（勤続2-27年、20-60代、介護福祉士資格取得者24名）から、7場面で653例の回答を得た。このうち75例のオノマトペの使用がみられた。この75例を意味と形式から分類した結果、入浴などで「すっきり、さっぱり」するといった肯定的な状態を提示する45例、口腔ケアで「あーん」と開口を促す3例、「ブクブク」など洗口を促す26例、その他1例に分類された。つまり、一般語彙化した「すっきり、さっぱり」45例で全体の半数を占めており、オノマトペの使用という認識もあまりないものと考えられる。場面別に見ると、口腔ケア38例、入浴介助21例であるのに対し、他の場面は0例～9例にとどまった。この口腔ケアでも、最初の声かけではオノマトペの出現はなく、利用者が洗口を拒否した場合に14例の使用があった。以上より、分析対象の7場面における介助のやり取り全体ではオノマトペはさほど使用されておらず、使用されとしても利用者の介助の拒否が連続した場合という使用傾向があることが明らかになった。従来の内省調査ではオノマトペの豊富さが指摘されているが、外国人介護人材に対する指導では、この使用傾向も合わせて検討することが重要であると考えられる。

参考文献

- 大場美和子（2020）「高齢者の想定外の言語行動に対する調整の分析—グループホームの外国人介護職員を対象に—」『社会言語科学会第44回大会発表論文集』118-121
- 大場美和子・吉田輝美（2023）「特養入居者とスリランカ人技能実習生のかみ合わないやり取りの分析」『社会言語科学会第47回大会発表論文集』167-170

ほめに対する応答に用いられる「いや」に関する一考察

—日本語母語話者と日本語学習者の相違に着目して—

彭津（東京外国語大学大学院生）

日常会話において「いや」は質問に対する否定を表すことばだと認識されている。これまでの「いや」に関する研究は質問-応答連鎖に着目するものが多く、ほめ-応答連鎖に関する考察はほとんどない。彭（2023）は、日本語母語話者は「いや」を多用することでほめに対して謙遜を表明しているが、学習者の使用頻度は少ないことを指摘している。ただしほめの応答に類出する「いや」に着目し、母語話者と比較した学習者の相互行為を考察する研究はなされていない。そこで本稿では、①ほめに対して「いや」で始まる応答にはどのような特徴があり、ほめの対象タイプとどのように関わっているか、②日本語母語話者（以下、JP）と中国人日本語学習者（以下、CN）にどのような相違が見られるか、という2つの研究課題を設定し考察を行う。

研究方法として、『BTSJ 日本語自然会話コーパス』に収録された日本語母語場面と日中接触場面の雑談会話各30組の計60会話を分析資料とした。分析手順として、まず、ほめの対象について張（2014）を参考に、聞き手自身と聞き手に属するものの2タイプに分ける。次に、「いや」で始まる応答の特徴について昂（2022）を参考に、「否定、回避、肯定、複合」の4パターンに分け、談話・相互行為レベルで分析する。

その結果、まず、ほめの応答に現れる「いや」は、ほめに対する抵抗を示し、「いや」に続く発話によって、その応答がほめの否定なのか、あるいは回避や肯定、それらの複合なのかを明らかにした。次に、JPでは、ほめの「いや」で始まる応答が初対面に多く現れ、特に「いや」を用いた回避型の使用が多かったが、友人同士では、聞き手が「いや」と軽い抵抗を示しつつ肯定するといった複合型応答が見られた。CNでは、親疎によらず「いや」を用いた応答の使用数がわずかであり、そのうち否定型応答の使用がやや多いことがわかった。

参考文献

- 昂燕妮（2022）「『ほめに対する応答』の日中対照分析—親疎関係に焦点をあてて—」『小出記念日本語教育研究会論文集』30、25-40
- 張承姫（2014）「相互行為としてのほめとほめの応答—聞き手の焦点ずらしの応答に注目して—」『社会言語科学』17（1）、98-113
- 彭津（2023）「話し言葉における談話標識『いや』の使用—日本語母語話者と中国人日本語学習者の比較から—」『2023年度日本語教育学会秋季大会予稿集』、215-220

複数言語話者による発話の仲介はどのように行われるか

— 多人数会話の観察をもとに —

千石 昂 (早稲田大学大学院生)

本発表では、日本語学習者が、言語の障壁を乗り越えてコミュニケーションを行うための「仲介」を行う、すなわち「仲介者」として振る舞うことが期待される存在であるとの問題意識に基づき、多人数会話における日本語学習者の「仲介」の観察を試みた。本発表における「仲介」とは、会話内において、ある参加者が発話する、あるいは発話を理解するのを、複数言語能力を用いて助ける行為をいう。

まず、本発表において観察対象とする現象の関連領域として、複言語・複文化能力 (コストほか 2011) および、言語学習者のコミュニケーション・ストラテジーとしてのコード・スイッチング (Faerch & Kasper 1983) に関する論考を取り上げ、本発表の立場との共通点、相違点を述べた。

続いて、日本語母語話者とタイ語を母語とする日本語学習者の双方が含まれる3人ないし4人の会話データから、3つの会話断片を取り上げ、「仲介」がどのように組織されているのか、会話分析 (Conversation Analysis) の手法を援用して質的に分析した。

分析の結果、仲介者としてふるまう参加者の存在は、グループ内での意思決定や修復に貢献していることが観察され、そのやりとりの中では、一部参加者の理解できない言語であるタイ語も用いられていた。しかし、仲介行為を行う際の言語選択には、その言語を理解できない参加者に「逸脱した行為」とであると判断されないための手続きがとられていることもうかがえた。これらをもとに、複数言語話者として会話に参加する日本語学習者には、言語の切り替えを伴うやりとりを組織し、「仲介」を行う能力が求められるということを主張した。

最後に、今後の課題として、本発表で扱ったデータが、その特性上、社内会話などには必ずしも当てはまらないこと、日本語教育における扱いについてさらなる研究が必要であることを述べた。

参考文献

- コスト・ダニエル、ムーア・ダニエル、ザラト・ジュヌヴィエーヴ (著) 姫田麻利子 (訳)
(2011) 「複言語複文化能力とは何か」『大東文化大学紀要人文科学編』49、249-268
- Faerch, C. & Kasper, G. (1983). Plans and strategies in foreign language communication, Faerch, C. & Kasper, G. (Eds.), *Strategies in Interlanguage Communication* (pp. 20-60). Longman.

留学生における日本人との友人形成に至る過程

—複線経路・等至性モデリング (TEM) による考察—

加藤万豊 (瀋陽薬科大学)

外国人留学生と日本人が良好な対人関係を築くことの重要性、留学生が日本人と友人関係を築くことの難しさは、横田 (1991) をはじめとする先行研究で指摘されてきた。一方で、日本人との友人関係を形成している留学生もいる。小松 (2013) では、留学生が積極的に日本人学生に働きかけるなどの行動を取れるかどうか友関係形成の成否を分けることが明らかにされている。しかし、これらの研究は女性を調査対象者としたものが多い。また、限られた期間の中でのコミュニケーションを考察したものがほとんどである。そこで本研究では、日本人の友人を持つ男性の外国人留学生がどのように友人関係を形成するに至ったかを時間の流れを重視して明らかにすることを目的とし、調査を行った。その際、現象の共通性と多様性に着目して考察した。

本研究では日本人の友人を持つ専門学校生の男性外国人3名を対象に、友人関係形成に関する60分程度の半構造化インタビューを行った。現在付き合いのある中で一番親しい友人を一人想起してもらい、現在の関係までを時間の経過に従い回想してもらった。分析にはTEM (複線経路・等至性モデリング) を使用した。

分析の結果、相手と話題・体験を共有するという必須通過点が認められた。体験を共有するようになるまでに、相手から仕事や勉強を教わる段階を経て、自分も相手に何かを伝えるという対等な関係への移行が見られた。また、友人として認識するまでに、相手が引っ越すなど空間的距離が拡大するケースが見られた。離れていても心は離れていないという相手に対する信頼感が友人としての認識につながっていた。

友人関係の形成における共通点として、自分の日本語への自信のなさが日本人と話す障壁となっていたこと、相手と出会ってからずっと良い関係を保っていたこと、相手から日本語における略語や若者ことばを学んでいたことなどが確認された。

個々に経験される多様性として、相手と出会ってから話をするようになるまでの期間、相手と親密になるために努力したと認識しているか、相手と自分は性格が似ていると感じているか、国の友人と同じように接しているかなどに相違が見受けられた。

参考文献

- 小松翠 (2013) 「中国人女子留学生の友人形成及び友人不形成に至る過程に関する研究」『群馬大学国際教育・研究センター論集』12、71-86
- 横田雅弘 (1991) 「留学生と日本人学生の親密化に関する研究」『異文化間教育』5、81-97

インドネシアにおける21世紀型スキル育成を目指した 日本語授業の実態

—中部ジャワ・バリの高校の調査から—

古内綾子（明治大学）

本発表は、自身らがインドネシアの中等日本語教育を対象に調査している「令和2～6年度科学研究費助成事業基盤研究（C）「中等日本語教育における21世紀型能力育成授業実践の課題と支援方法に関する研究」」の中から、2022～2023年に中部ジャワ（3校）とバリ（4校）で実施した調査について「高校でカリキュラムに沿ったどのような日本語の授業が実践されているか」、「カリキュラムの変化により教師の教え方はどのように変化し、教師はその変化をどう認識しているか」、「教師はカリキュラムの変化に伴う教育方法の変化をどのように学んでいるか」分析したものである。

見学した全ての授業で【日本語の語彙・表現の学習】と【会話、プレゼンテーションなどの話す活動】が行われた。教師らは「コミュニケーション」「コラボレーション」「クリエイティビティ」「リーダーシップ」「自律性／責任」という能力・資質の育成を意識し、「ペア・グループでの会話練習・教え合い」「発表に向けたグループ内での役割分担」（コラボレーション）や「発表内容を自分で考える」（クリエイティビティ）、「よい態度で授業に参加する」「クラスメイトを尊重する」（自律性／責任）等の活動を取り入れていた。授業全体の流れに注目すると、授業は2013年カリキュラム推奨の教育アプローチに沿って行われ、教師の授業中の行動は「注意すべき点を示す」「問いかけて、思考を促す」、「スモールステップの学びに分解する」、「学習手順やタスクの手順を明確に指示する」など、学生が積極的・主体的・自律的に学べるように、学びに対する足場掛けが多く観察された。また、2022年のカリキュラム・ムルデカ施行で学区制が導入され学生間の能力差が生じたため、学生同士の教え合いを促す独自教材の作成、お互いを承認・尊重する意識態度の育成も行われていた。学生が自分の学習に責任を持つためのリフレクションも重視し、指導されていた。インタビュー調査からは、教師は、カリキュラムの変化で、活動的な学びの増加、グループ活動やICT教材の導入、教師の役割変化等、学び方が学習者主体へと変化したと認識していた。リフレクションが重視されるほか、学生の動機づけ・心情面を考え「楽しい学び」が意識される等、学生の尊重・理解を重視する姿勢もあり、カリキュラム・ムルデカの影響だと考えられた。新しいカリキュラムや指導法は、他教員への相談やセミナー参加、様々なツールを使い学ばれていたが、日本語以外の科目の教員との勉強会参加、授業見学等、様々な教師の指導方法を知ることによって、学びを深めていることが分かった。

教師間の協働活動は教師をいかに変容させるか

—報告会の語りから「教育観」に着目して—

松尾恵理沙（東京国際大学）・狩野裕子（同）・在國寺翔平（元東京国際大学）

近年の日本語教育分野における教師研究には「教師間の協働」というキーワードを基に、他教師との関わりから生まれる自己内省や自律成長といった過程を経た後、それをまた現場である教室に還元していくという構図がある（中山ほか 2017、渋谷ほか 2018 など）。しかし、教師間の協働による教師の変容がどのように生じているのかについての詳細な記録を分析した実践研究に関しては発展の余地がある（牛窪 2021）。

本研究では、ある1つの教師コミュニティの協働活動（報告会）での語りから教師の変容を探る。協働活動を通して教師の気づきや学びがどのように生じ、また授業実践にどのような影響を与えるかを明らかにし、日本語教育現場における教師間の協働活動の意義を考察することを目的とする。

本研究の対象は、国内の大学で初級後半レベルの日本語コースを4ヶ月間担当する専任教師5名による5回の報告会の録音・録画（計190分程度）及びその文字起こしデータである。報告会ではフリータイム（週1回40分程度、各教師が自由な発想でその週の学習項目に紐づいて実施する授業活動）に関して実践を共有した。教師間の協働活動を通して教師の気づきや学びがどのように生じ変化していくかに着目するため、発表者3名で文字起こしデータを一行ずつ読み合わせ、「授業方法に関する語り」と「自己開示に関する語り」に焦点をあて分析を行った。

分析の結果、「授業方法に関する語り」に関しては、報告会という協働活動の場を設けることにより、教師の内省が言語化され、他の教師への共有と助言を通して授業実践方法の変化が生まれていた。また、「自己開示に関する語り」に関しては、教師自身が授業の反省点を他教師に抵抗なく開示する様子が繰り返し観察された。この開示と助言のやりとりが、自身の授業実践の捉え直しや気づき、さらには学びを促していた。

参考文献

牛窪隆太（2021）『日本語教育学の新潮流 29 教師の主体性と日本語教育』ココ出版

渋谷博子・伊達宏子・清水由貴子（2018）「教師の協働を振り返る教師の語りとその分析—SCATを用いて—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』44、65-82

中山英治・門脇薫・高橋雅子（2017）「理想的な教師間協働を経験している教師の語り—SCATによる構成概念と理論仮説—」『日本語教育実践研究』5、64-74

「振り返り」を振り返る

—日本語教育言説をめぐる探究的考察—

高橋七緒（アーヘン工科大学）・嶋津百代（関西大学）

『振り返り（reflection）』は、その定義や捉え方が曖昧なまま、教育の改善・変革に不可欠なものとして使用され続けている」（Clarà 2015 p.261）。この記述にあるような、定義の曖昧さと自明視される価値や意義を合わせ持つ用語は、「振り返り」の他にも多く存在する。そのような用語が定義や理解のすり合わせという作業なしに使用される状況に発表者らは問題意識を持ち、この中から「振り返り」を研究の対象とした。今津（2010）は、周知のごとく受容され使用されることばを「教育言説」と呼び、「教育に関する一定のまとまりをもった論述で、聖性が付与されて人々を幻惑させる力を持ち、教育に関する認識や価値判断の基本枠組みとなり、実践の動機づけや指針として機能するもの」（p.9）と定義している。「振り返り」は、学びや成長に必要な不可欠であるという「聖性」が付与されたことばとして機能していると言えるであろう。

では、「振り返り」のように、教育言説化したことばを使ったやり取りは、どのような問題を孕んでいるのだろうか。その一つに、現場に流布している言説であるがゆえに、言説の使用者に、その言説となっている論述を精査するの必要性を感じさせないということが挙げられよう。しかし、言説化したことばこそ、その定義や位置づけの問い直しをはじめ、理論的・実証的裏付けがどの程度あるのか、また、それに従って考えると、どのような場合に学習や教育にその有効性が期待できるのか、実践の中でどのような可能性があるのか、などの捉え直しをする必要があるのではないだろうか。

本発表は、教育実践者としてそのような教育言説の問い直しを重要視し、「振り返り」を例に、日本語教育言説について探究的な考察を行ったものである。まず先行研究から、「振り返り」の定義やその使われ方を概観し、教育言説の観点から検討した。次に、発表者らが「振り返り」を振り返った対話を紹介し、対話を通して展開されている「振り返り」のメタ的な語りをもとに、浮かび上がった論点に検討を加えた。以上の考察から、日本語教育現場や教育実践における言説の捉え方に対して提言を行っている。

参考文献

今津孝次郎（2010）「教育言説を読み解く」今津孝次郎・樋田大二郎（編）『続・教育言説をどう読むか』新曜社、1-23

Clarà, M. (2015). What is reflection?: Looking for clarity in an ambiguous notion. *Journal of Teacher Education*, 66(3), 261-271.

日本語教育を専攻する学生は 「市民性×日本語教育」をいかに捉えたか

—東日本大震災の被災地でのワークショップ参加者への
インタビューから—

澤邊裕子（東北大学）・早矢仕智子（宮城学院女子大学）

本発表の目的は東日本大震災の被災地で行われた「市民性×日本語教育」ワークショップ（以下、WS）に参加した学生への事後インタビューの発話データから、学生たちの「市民性」に対する認識を分析し、明らかにすることである。本WSは、多文化共生社会づくりのために自分たちが今後どのような活動をしていけるかについて考えることを目的として2023年8月下旬の二日間、東日本大震災の被災地である宮城県において実施された。具体的には震災遺構の訪問、学生と同年代の語り部の話を聞く活動、各大学が行う多文化共生プロジェクトについての実践報告会等のプログラムを通して、学生間で実践内容について意見交換を行った。参加学生は関西、関東、東北地方の六大学から日本人学生と留学生を含む17名で、大学および大学院において日本語教育を専攻する学生たちであった。（澤邊・早矢仕 2024）。調査はこのうち同意の得られた13名に対して半構造化インタビューの形式によりオンラインで実施された。WS参加後に「市民性×日本語教育」をどのように考えたか等の質問を中心に行い、発話内容を文字化し、佐藤（2008）の帰納的コーディングの手法を用いて分析した。その結果、焦点的カテゴリーとして「市民のイメージ」「他大学の学生との学び合い」「市民としての態度」「市民としての活動」「防災／災害時に対する意識」「社会における自身の役割」の6つとオープンカテゴリー35が抽出された。学生たちの多くはWS参加前、「市民性」という概念が形成されておらず「市民のイメージ」は曖昧であったが、WSでの「他大学の学生との学び合い」を通し、日本語教育が社会とつながる中核的な分野になり得ることに気づきを得、「市民としての態度」「市民としての役割」や「防災／災害時に対する意識」を高め、日本語教育を学ぶ者としての「社会における自身の役割」を認識した可能性が示唆された。

参考文献

- 佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法—原理・方法・実践—』新曜社
- 澤邊裕子・早矢仕智子（2024）「東日本大震災の被災地で行う『市民性×日本語教育』ワークショップのデザインとその成果—日本語教育を学ぶ六大学の参加学生と養成課程担当教員の振り返りから—」『2024年度日本語教育学会春季大会予稿集』216-221

避難民を対象に日本語学習支援を行う実践者にとっての 困難点と意識の変容

島田めぐみ(日本大学)・上林彰仁(ザグレブ大学)・江崎由利子(元日本大学大学院生)
遠藤さくら(元日本大学大学院生)・真保知子(同)・羽野美佳(同)
牧久美子(名古屋大学日本法教育研究センター)・松尾恵理沙(東京国際大学)
山下志織(元日本大学大学院生)・保坂敏子(日本大学)

ウクライナ避難民に対する日本語教育実践を報告する小野他(2023)や平畑(2023)では、支援者が心理的な課題を抱えていることが報告されているが、具体的な困難点や課題については明らかになっていない。そこで、日本語教師の経験のある実践者がウクライナ避難民を対象に日本語学習支援を行う際、どのような困難点を感じ、意識の変容を遂げたのかを明らかにすることを目的に調査を行った。調査対象者は、避難民に対し、オンラインで日本語学習支援を行う7名の実践者である。実践当事者らが互いに半構造化インタビューを行い、うへの式質的分析法を用いて分析した。分析の結果、支援前にはコミュニケーション面などに心配と不安があったことが明らかになった。ロシア語を解する者は媒介語としてのロシア語を使用しているのかという心配があり、対象者との間に共通言語がない者は対象者の理解の程度を確認することが難しいと感じていた。そのほか、精神面の傷に対する心配、対象者の様子への心配、話題に対する配慮などが見られた。また、事前情報不足を挙げる者が多かった。意識の変容については、支援前は、教え方や心理状況などが不安材料となっており、支援直後には、対象者の様子や配慮すべき話題などの課題が見えてくる。その後、心理的なケア、対象者の様子への対応など、課題がより具体化する。そして、戦争避難民への対応、授業デザイン、事前情報欠如が課題であるという認識に達している。日本語学習支援は、心理面の対応、配慮、言語面の対応の三つ巴で考える必要があるが、戦争避難民の場合、心理面の対応と配慮が重要であることが明らかになった。

参考文献

- 小野正樹・加藤由紀子・日暮康晴・薛安捷・陳雨詩・Dadayeva Maysa・成清萌花・Nguyen Xuan・Nguyen Hanh・Jin jin・Dadayev Esenmyrat・崔智恩・Vanbaelen Ruth (2023)「ウクライナ支援のための2022年度夏季集中日本語教育報告—外国語教育の可能性—」『筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育論集』38、41-55
- 平畑奈美(2023)「ウクライナにおける日本語教育の展開と侵攻後の課題—東洋大学のウクライナ人学生受け入れとの関連から」『国際文化コミュニケーション研究』6、45-66